

インクルーシブ保育を充実させる保育者意識の検討

－保育者アンケートをもとにした自立と関わり意識を育てる環境改善に向けて－

渡 辺 聡 幼児教育科

（2024年10月1日受理）

〔 要 約 〕

本研究は、インクルーシブ保育に関して、環境改善の視点を明確化する目的で行われた。方法として、協力を得た保育施設にアンケートを実施し、インクルーシブ保育の実態把握と改善の方向性を探ることとした。

アンケートは、質問に対して主に自由記述を中心に回答を求めた。回答は記述内容に沿って分類し、回答者の思いの傾向を掴むこととした。記述内容の分類・分析の結果、保育形態（同年齢編成保育中心・異年齢編成保育中心）の差異で、インクルーシブ保育環境に対する意識や対応に、差がみられる項目とそうでない項目がみられた。差がないものとして、「個の活動の尊重」に関すること、「加配支援」に関することが挙げられた。差がみられるものとして「事前の活動予告」がみられたが、さらに検討が必要になった。

保育者が感じるインクルーシブ保育の課題についての回答には、「個と集団の関係」、「保育者間の人的環境」、「保育環境や体制」についての記述で分類した。これらの内容から、多様な個性をもつ子どもたちの成長を保障するインクルーシブ保育の在り方を確認することができた。

また、今回のアンケート結果から、保育者と子どもとの関わりで考慮すべき内容確認ができた。しかし、インクルーシブ保育の推進で、子ども同士の関わりについての記述は確認できなかった。この点は、今後の研究につなげていく資料となった。

I. はじめに

インクルーシブという考え方が、保育・教育の世界でクローズアップされてから久しい。インクルーシブ（inclusive）という言葉は、一般に「包み込む」とか「内包する」というような語感から、そこにあるもの全てを一つの土俵に乗せてまとめていく印象がある。保育では、子ども一人一人のもつ多様な個性・行動特性や思考の傾向を尊重しながら、保育が行われていく。まさに、ありのままの子どもを受け入れながら、個人を尊重した保育が展開されることになる。

幼稚園教育要領では、「インクルーシブ」という文言を直接見つけることはできない。けれども、インクルーシブ保育を実現することに繋がる、総則やねらい及び内容、教育活動などの留意事項が示されている¹⁾。また保育所保育指針²⁾や幼保連携型認定こども園教育要領³⁾においても同様にインクルーシブという文言を直接見つけることはできない。

例えば、幼稚園教育のねらいとして掲げられた5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）の中の他者との関係の表記には、インクルーシブ保育に繋がるものが多くある。人間関係の領域だけでも、「身近な人

と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい」、「先生や友達と共に過ごす」、「友達と積極的に関わり」、「友達のよさに気付き、一緒に活動する」、「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし」、「友達との関わりを深め」、「友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする」等のねらいが表記されている。これらのねらいはどれも、インクルーシブ保育の中で重要なものである。

周知のようにインクルーシブという考え方が盛んになっていったきっかけは、2006（平成12）年の「障害者の権利に関する条約」が国連総会で採択されてからである。日本では、2013（平成25）年成立の「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）の成立がきっかけとなっている。具体的には各教育や保育施設には、障害があることで生じる不利益を「合理的配慮」と「合意形成」でその溝を無くしていくことが求められている。各施設では、障害をもった子どもの学びや生活を改善するための努力が行われ、現在に繋がっている。

けれども、インクルーシブの元来の意味である「包

み込む」という文言は、特別に障害をもった子どもの保育や教育だけに限定して考えるべきことではない。実際、保育の現場には、医療や公的機関で診断を受けた子ども以外に、多様な個性や行動の特性、思考の傾向をもった子どもが存在する。それらの子どもが保育・教育機関が設定したねらいや方法で学び生活し、成長している。しかし、一つの保育・教育目標であっても、一人一人の子どもたちが目標達成に向かう道程は様でない。そのため各施設では、子どもの学びや生活の様子に個人差があっても、多様な道筋で学びが続けられるよう、懐の深い受け入れ体制を準備する必要がある。さらに子どもが学習や生活の中で支え合いながら生活すること、また、助け合いながら自分のもっている力を伸すことが大切である。いわば、協同の精神がある保育や教育活動が展開されることで、インクルーシブというものの意味をさらに深めていくものと考ええる。

インクルーシブ保育を充実したものとするため、様々な保育施設では、その園の特長を生かして園独自のインクルーシブ保育を実施している。インクルーシブ保育を実現する保育形態に関する調査・研究では、芹澤（2022）が、子どもの主体的で豊かな遊びの重要性について報告している⁴⁾。報告では、保育形態を年齢別保育から異年齢保育に移行した園の報告を基に、子どもたちの主体性がどの様に顕現化していったか、その様子について示している。報告の中には子どもの主体性についての内容と共に「多様な遊びや遊び方が保障されると、支援児は保育を妨げる存在として排除されることはなくなる。」と、述べられている。この対象園が異年齢保育に移行した経緯も含め、インクルーシブ保育を実現する方法として重要な示唆を与えている。

また、小方（2012）は、自園での保育実践を紹介し、異年齢での保育活動を促す園環境について、その方法や形態について報告している⁵⁾。報告では「異年齢保育では、他者を思いやる気持ちの他に自分の思いを周囲の気持ちに合わせていく自己抑制としての関係性も重視される。」として、異年齢保育の重要性を述べている。子どもたちの日々の成長過程で、自分の思いをしっかりと表現できることは大切な能力である。しかし、自己表現は、その考えが他と一致しない場合何らかのトラブルが生じる。したがって、子どもが取り組みたい活動を満足させるためには、お互いの自己抑制も必要になる。つまり何らかの折り合いを付ける能力が必要になるのである。自己表現と自己抑制といういわば相反するような内容の資質を形成することが、大切になる。この二つの観点は、異年齢保育を実施する

際の配慮すべき観点ともなる。論文の中には、インクルーシブという文言は見つけることはできない。けれども、子どもたちが自主性や協同性をもち、園の保育活動でどの子どもも生かされていくことは、インクルーシブ保育で、配慮すべき観点となる。

それでは一体、子どもたちが自主性をもち他者との協同の基に、園で生活を送るために、保育者はどのような視点をもつと良いのであろうか。

本研究では、この問題を解決するために、保育者に実施したアンケート調査の結果から迫ることとする。アンケートの対象は、インクルーシブ保育について意識をもったり、何らかの悩みをもったりする保育者である。しかし、中にはその認識の薄い保育者も含まれている。

アンケートは、時期を隔てて実施した、二つのアンケートである。実施されたアンケートのうち、先に実施された一つ目のアンケートをもとに、二つ目のアンケートは実施されている。ただし、二つ目のアンケートの質問項目には、対象園の実情やインクルーシブ保育に関する保育者の意識から、質問項目に若干の修正を加えている。

Ⅱ. 研究の方法

1. 調査の実施対象者

〈アンケートⅠ〉

- ・認定こども園A 保育者19名
- ・認定こども園B 保育者22名

〈アンケートⅡ〉

- ・認定こども園C 保育者13名

ただし、アンケートについては、任意提出を担当者に説明し、配付後日に提出のあったものを採用することとした。また、同意の有無および活用の有無は、アンケート提出をもって判断することとし、倫理的配慮とした。

また、アンケートの実施は、調査を承諾した施設長または、担当責任者に依頼した。アンケートには、調査の目的や活用に関する趣旨が記載されているので、保育者は、記入の際に内容を理解することになる。このことは、本アンケートの内容と共にアンケート記入者である保育者に周知されている。

2. 調査の実施日

①アンケートⅠの配付および実施

- ・2024年2月17日（土）～2月24日（土）

二つの園にアンケートを持参し協力を依頼すると共に、インクルーシブ保育に関する園の様子について状況を視察する。アンケートについては、記入に時間を

要することから、後日施設長の配慮の基、資料として提出してもらった。特に遠隔地の保育施設に対して、安全に配慮を施し、郵送や電子媒体を活用した。

②アンケートⅡの配付および実施

・2024年8月28日（水）～9月12日（木）

2回目のアンケート調査の対象は、インクルーシブ保育について、取組（内容や方法）を模索し、その方向性を探っている園の保育者に実施したものである。したがって、日々の実践の中で感じる生の思いを、記述することを期待している。具体的には、インクルーシブ保育が、子どもたちのより良い成長（自主性の伸長＝自立・協同性の醸成＝共生）に繋がることを期待

している。またアンケートの提出に関して、アンケートⅡにおいても、アンケートⅠ同様に施設長やまたは担当者の安全配慮のもとに、資料の提示をいただいた。

また、本アンケートは、インクルーシブ保育に関する同様の調査をするために、小学校の教員に対しても行っている。設問Q1に、「（ ）小学校教諭」の選択欄があるのはそのためである。今回の報告では、その内容は扱わないこととし、幼児教育を対象に行っていく。

3. 調査の内容

実施されたアンケート調査は、類似した2種類のア

表1 保育者配付アンケートⅠ内容

インクルーシブ保育・教育に関するアンケート	
<p>このアンケートは、子どもとのかかわりの中で気になっていることや感じていること、こうあってほしい願いなどをお尋ねして、インクルーシブ保育・教育内容や方法の改善、また、保育者・指導者の負担軽減に資する目的で行うものです。回答で個人が特定されることはございません。回答は数値で集計したり、個人が特定されない形で記述内容を論文に活用したりいたします。また、結果は、まとめ次第還元いたします。</p> <p>ご協力いただければ幸いです。</p> <p style="text-align: right;">（羽陽学園短期大学 幼児教育科 渡辺聡）</p>	
<p>Q1. 先生について、お尋ねします。○をつけてお答えください。</p> <p>（ ） 保 育 者 【 保育歴 年 ・ 現在の担当 歳児】</p> <p>（ ） 小学校教諭 【 担当 年生 ・ その他 】</p>	
<p>Q2. 現在の保育・教育形態についてお尋ねします。現在の保育・指導はどの形態が主ですか？</p> <p>（ ） 年少・年長及び学齢等、同じ年齢で編成されたクラスで、保育・教育を主に行っている。</p> <p>（ ） 年少・年長及び学齢等、同じ年齢で編成されたクラスだが、時々異年齢集団を編成して保育・教育を行っている。</p> <p>（ ） 異年齢の子どもで組織されたクラスだが、時々同じ年齢集団を編成して保育・教育を行っている。</p> <p>（ ） 異年齢の子どもで組織されたクラスで、保育・教育を主に行っている。</p>	
<p>Q3. 上記の形態で行われている普段の保育・教育活動ですが、特別に支援を要する子どもに対する保育・教育の様子をご記入ください。保育・教育がうまくいった例や問題点など何らかの困りを感じている例などをご記入ください。</p> <p>（自由記入欄）</p>	
<p style="text-align: right;">〈裏面へ〉</p> <p>Q4. 現在、多様性を尊重しどの子どもも排除されない、「インクルーシブ」保育・教育の考え方が導入されて久しくなります。先生が、「インクルーシブ」保育・教育の考え方を、普段の保育・教育活動で実践するにあたり、大変だなと感じるところはありますか？あれば、それはどんなことですか？</p> <p>（自由記入欄）</p>	
<p>Q5. 特別に支援を要する子どもたちが自分のクラスにいた時、先生はどのような手助けや方法、または体制などがあれば嬉しい、よいと思いますか？ 思いつくままに、書いてください。</p> <p>（自由記入欄）</p>	

ンケートを行った。アンケートⅠとアンケートⅡの違いは、内容が同じ箇所と更に質問項目を追加して修正を行った箇所が含まれていることである。

3-1. アンケートⅠに関する調査

保育者に配付したアンケートの内容を表1に示す。本アンケートで設問として設定した内容は、五つある。

設問Q1は、保育者が担当しているクラス園児の年齢と、保育者自身の保育経験歴を尋ねている。本設問によって、回答をした保育者の経験年数と担当する子どもの年齢バランスを確認する目的で設定した。

設問Q2は、保育者が現在行っている保育の形態に関する設問である。本設問の回答予想は、同一保育施設では、同一の回答が予想される。しかし、保育施設によっては保育者同士のファジーな認識がありうるという懸念から敢えて設問を設定した。

設問Q3は、保育者自身が支援を要する子どもに、どんな関わりをもってきたのか、内容を記入してもらう。その内容は失敗経験や成功経験に繋がる内容であることを想定している。この設問によって、保育者が支援を要する子どもや行動が気になる子どもへの対応に、インクルーシブ保育の意識があったかどうかを探る資料とすることにした。

設問Q4は、重要性が叫ばれて久しいインクルーシブ保育について、保育者がその実践において感じる困難さの内容とその度合いを記述してもらった。この内容を分析することで、インクルーシブ保育の実践に関する障壁を明らかにした。また、対応策を考える資料とした。

最後に設定した設問Q5は、インクルーシブ保育の実践にあたり、保育者が抱いている願いを問う設問になっている。こんな支援があったら嬉しいという記入内容は、保育者の日頃の困りの実態に直結する内容になる。記入内容を分析することで、インクルーシブ保育の実践を進める資料となる。

3-2. アンケートⅡに関する調査

アンケートⅡは、サンプル数を広げるために実施した。しかし、アンケートには、若干の加除修正をおこなっている。その理由は、インクルーシブ保育に関する差し迫った状況の差を考慮したからである。アンケートⅠを実施した保育施設では、施設管理者への事前のヒヤリングで、支援の必要な子どもへの関わりに苦慮する保育者が多いという報告を受けている。一方、アンケートⅡを実施した保育施設では、インクルーシブ保育を様々な保育環境から進めようと、取組を始めている施設である。施設自体の実践的取組も含め、数

度の訪問でも、保育者からはその方向性に関する問い合わせをされている。施設の状況を踏まえ、アンケートⅡには、アンケートⅠの設問に、加除修正を加えたものを実施している。実施したアンケートⅡの加除修正した設問について説明する。

設問Q1は、アンケートⅠと同様であり、保育者の経験年数や年齢バランスを確認するために質問している。

設問Q2もアンケートⅠと同様の理由から行っている。

設問Q3は、「現在までの保育経験の中で」という文言を挿入した。その理由は、アンケートⅠでの回答の中で、記入の際に現在の状況だけなのか、それとも今までの経験も含めるのかという問いがあったためである。アンケートⅡを実施した保育施設は、インクルーシブ保育に関する思いが動機づけられている。このことを考慮して結果を後述する。

設問Q4は、アンケートⅠと同様の理由と内容で質問している。

設問Q5は、新しく挿入した設問項目である。この質問は、「現在自分の担当しているお子さんの中で」という条件で尋ねている。本設問の目的は、行動が気になる子・支援を要する子への保育活動を、どのような視点や方針で行ってきているかを掴むために行っている。記入欄には、記入の際の手助けとなるよう、予想される下記の「3つの観点」を設定した。

- ①保育施設・環境面（保育室・園舎等）での工夫や配慮・取組
- ②保育者の対応・関わり方の工夫や配慮・取組
- ③保育計画（年間・期・月等）や活動の工夫や配慮・取組
- ・その他

この3つの観点は、アンケートⅠの集計結果を分類した結果、大別できる回答の傾向から導き出している。詳細については、後述することとする。

設問Q6は、アンケートⅠにおいて行った設問Q5と同様の内容である。アンケートⅡを実施した保育施設においても、同様に記入してもらった。回答のサンプル数を広げることで、保育施設の今後の体制づくりの一助となることを期待した。

Ⅲ. 結果と考察

アンケートの結果について考察する。アンケートⅠとアンケートⅡの実施時期が違う。また、アンケートに協力した保育施設に地域差がある。しかし、時期や地域の違いを踏まえながらも、インクルーシブ保育についての様々な視点を導き出すことは、今後の研究の資料となる。

表2 保育者配付アンケートⅡ内容

インクルーシブ保育・教育に関するアンケート

このアンケートは、子どもとのかかわりの中で気になっていることや感じていること、こうあってほしい願いなどをお尋ねして、インクルーシブ保育・教育内容や方法の改善、また、保育者・指導者の負担軽減に資する目的で行うものです。回答で個人が特定されることはございません。回答は数値で集計したり、個人が特定されない形で記述内容を論文に活用したりいたします。また、結果は、まとめ次第還元いたします。

(羽陽学園短期大学 幼児教育科 渡辺聡)

ご協力いただければ幸いです。

Q 1. 先生について、お尋ねします。○をつけてお答えください。

() 保 育 者 【 保育歴 年 ・ 現在の担当 歳児】
() 小学校教諭 【 担当 年生 ・ その他 】

Q 2. 現在の保育・教育形態についてお尋ねします。現在の保育・指導はどの形態が主ですか？

() 年少・年長及び学齢等、同じ年齢で編成されたクラスで、保育・教育を主に行っている。
() 年少・年長及び学齢等、同じ年齢で編成されたクラスだが、時々異年齢集団を編成して保育・教育を行っている。
() 異年齢の子どもで組織されたクラスだが、時々同じ年齢集団を編成して保育・教育を行っている。
() 異年齢の子どもで組織されたクラスで、保育・教育を主に行っている。

Q 3. 上記の形態で行われている普段の保育・教育活動ですが、現在までの保育経験の中で、様子が気になる子や特別に支援を要する子どもに対する保育・教育の様子をご記入ください。また、保育・教育がうまくいった例や問題になった例など、困りを感じている例などをありましたらご記入ください。
(自由記入欄)

Q 4. 現在、多様性を尊重しどの子も排除されない、「インクルーシブ」保育・教育の考え方が導入されて久しくなります。先生が、「インクルーシブ」保育・教育の考え方を、普段の保育・教育活動で実践するにあたり、大変だなと感じるところはありますか？あれば、それはどんなことですか？
(自由記入欄)

〈裏面へ〉

Q 5. 現在、ご自分の担当しているお子さんの中で、様子が気になる子や特別に支援を要する子どもはいいますか？また、ご自分がそれらのお子さんを保育する際、以下の3観点の中で自分やもしくは保育者・園全体の共通した取組みとして行っていることはありますか。あればご記入ください。
・該当するお子さんが (いる いない)
(自由記述欄)
～施設環境・保育者の対応・保育計画・その他の観点で記入～

Q 6. 特別に支援を要する子どもたちが自分のクラスにいた時、先生はどのような手助けや方法、または体制などがあれば嬉しい、よいと思いますか？ 思いつくままに、書いてください。
(自由記入欄)

1. 担当および経験年数と保育の形態（設問 Q 1 ・ 2）

アンケートⅠおよびアンケートⅡの回答は、合計三つの保育施設から回収した。担当児および回答者の経験年数を、設問 Q 1 で尋ねた。

各保育施設の形態は、いずれも認定こども園として

運営している。しかし、認定こども園制度が発足以前は、二つの調査園は幼稚園であり、残りの一つの保育施設は、保育園として運営を行っていた経緯がある。

各施設の担当および保育経験年数の状況は以下の通りである。

表3に示すとおり、回答を寄せた保育者数は、各園

表3 保育者の担当保育児年齢（人）

担当児年齢	施設A	施設B	施設C	合計
0歳児	1	4	0	5
1歳児	1	3	1	5
2歳児	1	4	1	6
3歳児（年少）	4	2	3	9
4歳児（年中）	5	2	2	9
5歳児（年長）	5	2	2	9
その他	2	5	4	11
合計	19	22	13	54

表4 保育者の経験年数（人）

経験年数	施設A	施設B	施設C	合計
1～5年	6	5	5	16
6～10年	4	2	1	7
11年～15年	4	2	0	6
16年～20年	3	4	3	10
21年～25年	1	7	2	10
26年以上	1	2	1	4
無回答	0	0	1	1
合計	19	22	13	54

で多少のばらつきが見られる。しかし、三つの保育施設をトータルで考えると、各年齢児を担当している保育者が回答を寄せたことになる。

次に各施設の保育経験年数別の保育者数を表4に示す。表4は、回答した保育者の経験年数を5年間隔で区切り、各施設の保育者の偏りを調べたものである。表4からは、経験年数が1年から5年という比較的保育経験の浅い保育者が多い傾向が見られる。また、三つの保育施設の合計で考えると、経験年数には、ほぼ複数の保育者から回答が得られている。

今回、この二つの分類の他に、回答した保育者の経験年齢と担当児がどんな関係になっているか傾向を比べた。その様子を、表5・表6および図1・図2に示す。上記の表（実数）や図（割合）から担当や経験年齢について考察する。図1からは、本アンケートに回答した保育者が多いのは、主に3歳児から5歳児を担当していることが分かる。園の規模にもよるが、各園には同年齢に複数のクラス配置があり、自ずと担当保育士の割合が増えることが考えられる。注意しなければならないのは、各園の配属された保育者の保育経験年数である。三つの保育施設において、保育経験年数1年～5年の保育者人数が比較的多い。その合計も16人となり、他の経験人数の括りよりもはるかに大きい。したがって、保育経験の比較的浅い保育者がクラスの担任や副担任として子どもの保育や教育に当たっていることになる。

インクルーシブ保育を考えた場合、経験年数の浅さや対応に対するスキルの高さは、重要な要件となる。なぜなら、特別に支援を要する子どもや言動が気になる子の対応は、とても繊細な対応が求められるからである。保育者は、子どもの資質や特性を理解できても、一人一人の子どもへの対応は千差万別で、完全な解決方法を決めかねることが多い。保育現場では、試行錯誤の中から、いわば最適解を日々の保育から探り出すのであって、絶対的な方法はないことが多い。

本論文は、インクルーシブ保育をこれから積極的に構築していく必要のある保育施設が、保育の際にどのようなことに留意すべきか、三つの保育施設の保育者から探ることとする。

設問2では、現在の保育の期間について質問している。三つの園のうち、施設Aと施設Cは、幼稚園が認定こども園になったものであり、施設Bは保育園が認定こども園になった保育施設である。

各施設の保育・教育形態を表6に示す。施設Aと施設Cは、同年齢編成保育中心の施設であり、施設Bが異年齢活動を積極的に取り入れている施設であることが確認できた。施設の保育・教育形態も考慮しながら、インクルーシブ保育・教育の様子について考えていく。

設問Q3では、主に支援を要する子や言動が気になる子どもへの関わり方を拾い上げている。関わり方について、記入内容を分類する。その際、保育経験期間も考慮しつつ、インクルーシブへの関わりを模索する。

2. 支援を要する子どもへの関わり（設問Q3）

設問Q3では、今までの保育経験を含め、保育者が関わってきた内容やその関わり方について質問した。保育者は、自らの関わりについて成果があがった事例や逆に問題となった事例を記述した。それらの事例を以下に示す。三つの園の保育者の記述内容は多岐にわたる（表7）。しかし、記述内容には、一定の類似性が見られた。本論文の目的は、保育環境として考慮すべき内容や方法を明らかにすることである。そのため、類似する記述内容については、内容や記入の傾向をまとめて報告する。ただし、保育者は事例を複数記入しているものもあり、総数は記入件数の総数で計算してある。

効果が上がった回答例で多かったのは、表7の記述内容4にみられる記述である。子どもの興味や関心を尊重する。そして、保育者が計画した集団活動に無理やり参加させず、個の活動に優先して浸らせる。子ど

表5 担当保育児年齢と保育者経験年齢（人）

	1～5年	6～10年	11～15年	16～20年	21年～25年	26年以上	合計
0歳児	1	1	0	1	1	1	5
1歳児	1	1	0	1	1	1	5
2歳児	3	0	0	2	1	0	6
3歳児（年少）	4	1	2	1	0	1	9
4歳児（年中）	4	1	2	1	0	1	9
5歳児（年長）	4	1	1	2	1	0	9
なし・複数担当	0	2	3	1	3	2	11
合計	17	7	8	9	7	6	54

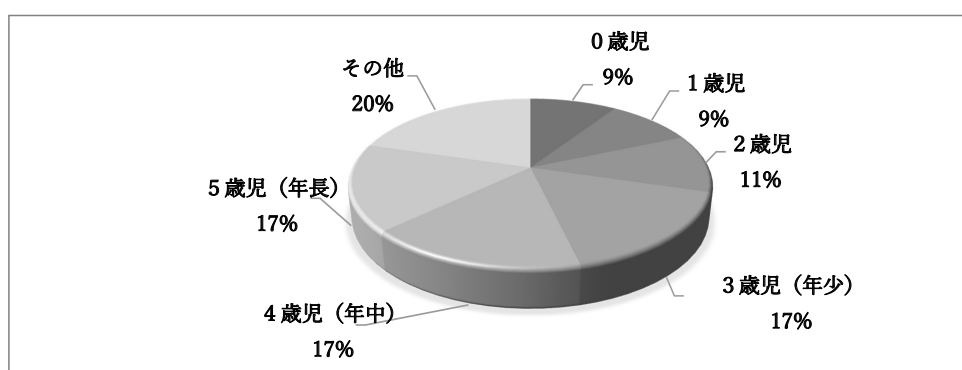


図1 担当保育児年齢の割合

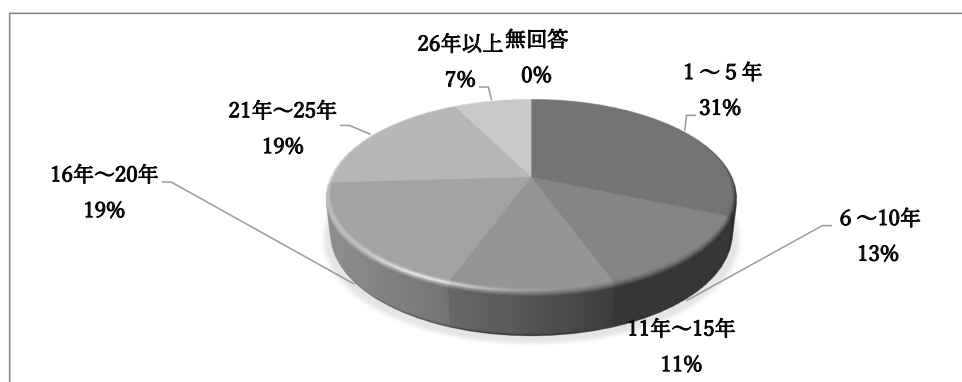


図2 保育者の経験年数

表6 保育・教育の形態

形態	施設A	施設B	施設C	合計
同年齢編成保育	11	3	11	25
同年齢編成保育 （異年齢活動有）	8	3	2	13
異年齢編成保育 （同年齢活動有）	0	13	0	13
異年齢編成保育	0	2	0	2
未記入	0	1	0	1
合計	19	22	13	54

もは自分が興味をもった活動に十分浸った後には、集団で楽しんでいる活動に参加する。また記述内容5にみられるように、支援の必要な子どもの特徴をつかんだ事前の活動予告や情報提供がある。子どもの特徴にもよるが、活動の見通しをもたせることで、子どもが安心して生活が送れるようになった。子どもの心の安心・安全が保たれる関わり方の例ともなっている。

表7の記述内容1は、支援を要する子どもに対して、最もとられている対応である。子どもの状況に応じて、加配の保育者がいることは大切である。積極的な配置

表7 支援を要する子への効果的な対応

記述内容	施設A	施設B	施設C	合計
1. 支援対象児のための支援者（加配等）がつく（個別対応）	3	3	2	8
2. 視覚情報を積極的に呈示	2	0	2	4
3. 視覚情報と言語情報（行動を促す指示内容の明確化）の併用	1	0	4	5
4. 好きな活動に十分浸らせながら、次の活動に意識づけ（個～集）	5	5	3	13
5. 計画的に事前の活動予告・情報提供（スケジュール化）	1	5	2	8
6. 集団を意識させる声掛けの工夫・活動呈示（集団が見える）	1	2	0	3
7. 支援児の好む活動を、集団活動に位置付けた保育実践	1	0	0	1
8. 異年齢の子ども・異年齢集団との関わりで自信と積極性	1	0	0	1
9. クラス以外の落ち着ける場所・避難スペースの活用（対話）	1	0	2	3
10. 他の子どもの支援児特性を情報共有・努力の理解	0	1	0	1
11. 保護者への関わり（こまめな情報提供・保育方針の共有）	0	2	0	2
12. 保育者間の情報交流	0	1	0	1
13. 外部支援員との情報交流	0	2	0	2
合 計	16	21	15	52

表8 支援を要する子への対応での問題点

記述内容	施設A	施設B	施設C	合計
1. 加配が付くことの重要性（他の保育に専念できない）	2	3	1	6
2. 専門の人材不足で不安	1	0	0	1
3. 専門的知識不足で不安（発達障害等対応に）	1	1	7	9
4. 複数の支援児・教師の共同や話し合いが十分できない・試行錯誤で	3	0	0	3
5. 集団に入れようとする願いが前面に出ると不安に	1	0	0	1
6. 保護者の理解不足（生活リズム順応のお願いが響かない）	1	0	1	2
7. 落ち着く静かな（個の場所：刺激情報が少ない）所がない	0	1	0	1
8. クラスの一員として他の児童と触れあう時間を増やしたい	0	1	0	1
9. 園の負担は、職員の負担となってしまう	0	1	0	1
10. 対応した経験が無い・いない	0	3	0	3
合 計	9	10	9	28

と活用が必要である。しかし、支援を要する子どもを加配の保育者に任せ、個の活動で終結させるのではなく、全体の活動を意識した保育活動にしていくことが大切になる。また、表7の記述内容6には、個の活動から集団での活動へ誘うものもあった。内容は、以下のものである。

- ①切り替えが上手くできない時があるが、言葉かけなどの工夫。
- ②他児と同じ活動に参加しづらい場合には、保育者がつき、活動できるといい。他の子どもが影響される場合も見られる。
- ③あそび保育の自然な暮らしの中で、あそび時間、集まり時間など、自由に集団を行き来できる環境を整える。

表9 「知識不足」を回答した保育者の経験年数

保育年数	人数
1～5年	3
6～10年	2
11年～15年	0
16年～20年	2
21年～25年	1
26年以上	0
未記入	1
合計	9

保育者の言葉かけによって、子どもは個の活動から集団への活動に動機づけられる。さらに、保育者の個別対応で集団への活動の意欲が高まることもある。③の回答のように、子どもが自由で主体的な活動選択が

できる保育環境を設定する。それにより、集団活動への意識をもつ気持ちが、生まれることを想定した取組と記述もみられた。

一方、表7の記述内容2・3にあるような、物理的環境との併用が効果的な保育に繋がっている。これらの表記は、子どもとの関わり方の工夫とともに、物理的環境の大切さを浮き彫りにしている。表7の記述内容9の工夫も子どもたちの自主性と時によっては協同性を構築するための環境構成である。物理的環境を構築することは、保育の現場では欠かせない要素になっていることが分かる。

次に、保育者が日々、または今までの経験の中で、問題点と挙げている内容を見る。表7や表8を見ても明らかなように、三つの施設では、記述内容1「加配保育者」の複数配置に関する満足度や問題点が寄せられている。インクルーシブ保育を考えた場合、システムとしての学級1名の主担任の保育体制が、保育者の負担感の増加に影響を与えている。したがって、支援を要する子どもに一人の補助保育者が付くことで問題を解決することだけではなく、インクルーシブな環境構成を迫及した保育環境の設定が重要になってくる。施設Cの保育者に多いのが、表8の記述内容3の「専門的知識不足」から発生する、保育内容への「不安感」に関する内容である。回答をした保育者の保育経験年数に、施設Aと施設Bの1名ずつを合わせた結果が、表9である。この問題を記入した保育者は、合計9名であった。この中の5名が、保育者経験が10年以下の保育者である。これは報告数だけでみても、支援を要する子どもを集団中心の活動に適応させることの難しさを物語っている。表7では、記述内容1に「加配が付くことの重要性」を記述している保育者が多い。加配のしくみは、支援を要する子どもへの対応として行われている対応策である。しかし、保育者は、個別の対応が不足している状況であったり、個別の保育活動から集団での保育活動への移行に問題があったりすることに悩みを抱えている記述をしていた。例えば、

- ・「専門的な人材や教材（知識）の不足を感じる為、適切な支援ができていないか不安」
- ・「全体と同じことをすることが難しいということを保護者の方にご理解いただくことも簡単ではなかった。」
- ・「クラスの一員として同じクラスの子も達と触れ合い関わりを意識しながら少しでも多くの時間を子ども同士の中で過ごして欲しい。」
- ・「見本を見せることで理解する子もいたが、どこまで理解しているかわからないことが多くあった。一斉活動が多いので一緒に取り組む際にどうしたらいい

いのか…と思うことが度々あった。」

またさらに、保育経験が15年を超える保育者も、記述内容1や記述内容3に関する問題点を挙げていた。

- ・「孤独になりやすい（保育士、子どもと共に）。専門の知識が（経験）ないのであれば尚更、あれこれ試行錯誤しながらやってみても相談相手もいない、誰とすれば良いか分からない状態でした。初めの数ヶ月はとても孤独でした。」
- ・「トラブルが防げず、相手の子の保護者におわびをする際、気になる子であることが公になっていないため、理解をなかなか得られなかった。」

このような困難な状況を把握するために、アンケート設問Q4では、インクルーシブ保育・教育の実践にあたりその困難さについて焦点を当てた質問をしている。

3. インクルーシブ保育・教育実践の困難さ（設問Q4）

設問Q3では、保育者の関わった内容や方法について、成功例や失敗例を明らかにした。設問Q4では、問題の対応策として行われるインクルーシブ保育・教育について、特に課題を浮き彫りにしていくこととした。回答者が挙げた課題の分析により、保育環境の充実に必要な内容や考え方を明らかにしていく。アンケートの回答結果を分類したものが、表10である。その割合を表わしたのが図3である。保育者の回答をみると、記述1が40件56%、次に記述6が8件11%、記述2が7件10%という結果となり、問題を考える3つの視点が浮き彫りになった。

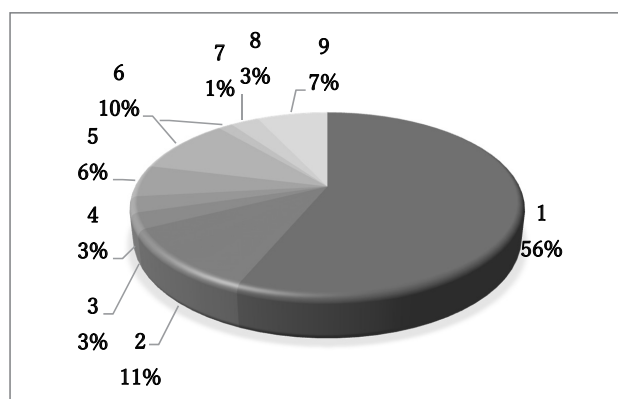


図3 インクルーシブ保育・教育の困難さ

表10 インクルーシブ保育・教育の困難さ意識

記述内容	施設A	施設B	施設C	合計
1. 個と集団の関係（スピード・支援程度・課題程度・ニーズ対応）	16	14	10	40
2. 保育者間の人的環境（サポート、意見交換、情報交流、方針決定）	4	4	0	8
3. 子どもの意識（対等さ、「できる・できない」関係、違いの受容）	0	0	2	2
4. 個人の劣等感	1	0	1	2
5. 保護者との関係	3	1	0	4
6. 園としてのフォローアップ態勢（職員教育・研修・個人差対応）	0	2	5	7
7. 場所などの物理的環境	0	1	0	1
8. ない（多様性は当然、未経験）	1	1	0	2
10. 未記入	1	3	1	5
合計	26	26	19	71

それらは、

- ①個と集団の関係に関する問題（記述内容1）
- ②保育者間等の人的環境に関する問題（記述内容2）
- ③保育施設の体制に関する問題（記述内容6）

である。これらの問題が、複合的に日々の保育活動に影響を与えていることを示している。上記3つに分類できる問題を具体的にみている。

①個と集団の関係に関する問題（記述内容1）

三つ全ての保育施設の保育者から、突出して多い問題が、個と集団の関係についてであった。具体的内容は様々である。個と集団の関係についての問題は多岐にわたる。記述された内容例を挙げる。

- ・「全体に共有したいことや、全員に経験させたいことの他に、支援が必要な子も無理なく作ることができるものなど、常に“考える”ということが大変に感じます。」（課題の程度）
- ・「資源と支援の不足、異なるニーズへの対応、クラスの管理と個別ケア。」（支援程度・ニーズ対応）
- ・「支援の必要な子に保育を合わせると他児に物足りなさを感じたり、もっとできるのに制限されてしまったりすることがある。」（課題程度）
- ・「空間に見合った小集団での活動（取り組み）ができると良いのではと感ずることがあります。また、配慮が必要な子へ目を向けがちになってしまうので、全体を見ながら個への配慮をしていくことへの難しさを感じることはよくあります。」（ニーズ対応）
- ・「一人ひとりの発達段階を踏んで関わっているが、どこまで集団生活の輪に入るべきなのか悩むことが多かった。」（支援程度）
- ・「個としての理解のスピードに差が生じることが考えられる。その中で上手くクラス運営をしていく為

にはどうしたら良いか。集団と個のバランス。」（スピード）

- ・「活動する上で、『できる子』にとっては簡単なものの、『援助が必要な子』にとっては難しいものになってしまう。」（課題程度）
- ・「“自分でできることは自分で”という思いはあるがやるスピードには個人差があるため、見守りすぎてしまったり、やる気が出るまで時間がかかる子だと、みんなと一緒にすることができない（時間的に待てないこと）ことや少ししかできないということもある。」（スピード・ニーズ対応）
- ・「（前略）クラス活動の中で経験できることもあるが、ニーズに対応した保育を行うことの難しさを感じる。（中略）特に今の年長児にはみんなで考えよう、相談しようという投げかけをして子ども同士の関係性が育つよう見守り援助している。（支援程度・ニーズ対応）」

保育者は、クラス経営の中で発達差から発生する、個と集団の関係で問題意識をもつ。その中でインクルーシブ保育の関わりに難しさを感じている。鬼頭（2022）は、集団づくりの構造を調べ、インクルーシブ保育における集団形成の大切さを報告している⁶⁾。その中で、友達に興味や関心が無い子どもたちへの対応として、認め合いや協同的な態度を求めることの難しさを指摘している。報告では、まず仲間との「関わりの楽しさ」を感受できる働きかけを推奨している。そのはじめのステップとして「（前略）集団が発展していく構造として、共感・共同の世界を創り出していくことができる集団を形成する、そのうえで、互いの違いに気づき、違うからこそ面白く、どうやっていくとみんなが過ごしやすいか、考え合える働きかけをしていくことで互いの差異を認め合える集団になっていく。」と述べている。個と集団の問題に直面して

いる保育者の多くは、予定している保育内容を保育者自身と支援を要する子どもとの関係で捉えている。この構造で問題解決を図ろうとしても、その解決は容易ではない。視点を変えた解決方法が必要である。そのひとつが、子どもたち自身が自ら取り組み、主体的に自分たちの手で問題解決が遂行できる環境を整えることが考えられる。環境が楽しいからこそ、自らも自主的に活動し、かつまた、一人ひとりが友達とも関わることのできる集団形成に繋がると考える。

②保育者間の人的環境に関する問題（記述内容2）

多様な個性をもち、発達の様相の違う子どもたちを、保育・教育する場合、複数の保育者が保育室にいて連携をとり合うことは、インクルーシブ保育・教育には有効な方法のひとつである。表10の記述内容2には、この視点に関する問題点の件数をまとめた。複数の保育者の必要性の他、保育者同士の一致した保育方針の構築など様々な記述がみられた。具体的な記述例では、

- ・「1人1人の個々に合わせて対応していくことのむずかしさを感じます。自分自身が大丈夫でもパートの職員や困り感を抱えながら子どもと向き合っています。一緒に考えたいと思っていますが、サポートの必要なことを考えれば考えるほど、先生方のサポートも必要で大切なことだと思います。」
- ・「どうしても発達の違いで理解が難しい子がいると、その子がその子そのまま楽しい、心地よいと感じられることを大事にしていたが、それは担任やその他職員の感じ方・捉え方で決めて良いのか。」
- ・「一つ言える事は人的環境にゆとりがあるということは大切なのではと思います。」
- ・「多様性を尊重しながらきまった保育者の人数の中で子ども一人ひとりの安全を確保していくのにまとめていかなければいけないところもあると思うので、どのように進めていけばよいか。」
- ・「一人ひとりにできるだけ合わせたり個性を生かしたい反面、集団となるとそれだけ個々の関わりが必要となり、保育士の人数が必要となる場合があるのではと感じます。」
- ・「一人ひとりに合わせた関わりがしたくても、保育士に人数のゆとりがなくは不可能なことも多いのがジレンマです。」

保育者の回答は、保育者の数的ゆとりが前面に出ているものが多い。しかしその前提として保育者間の連携がとれていることがある。また、子どもの状況の情報共有とそれに基づく保育方針や保育方法の共有がなされていることが基本となる。これらの条件を踏まえて保育者の手厚い配置となる。

③保育施設の体制に関する問題（記述内容6）

保育者の複数配置も含めたインクルーシブ保育・教育を推進するためには、組織としても体制を整えることが重要である。施設ハード面の体制を整えることで、保育者が自信や余裕をもって子どもの保育にあたることが可能になるからである。この問題が解決する努力がなければ、保育者の負担は大きくなると考えられる。保育者の記入内容例は、

- ・「特別支援を要する子どもたちがクラスにいる担任の先生は本当に大変だと思います。毎日、活動や行事に追われながら粘り強くしっかり関わっている先生方に敬意を表します。インクルーシブ保育という言葉は初めて聞きました。逆にどの様にすればその様に多様性のある子どもたちをうまく保育していけるのか、実践している園があれば知りたいです。（後略）」
- ・「（前略）また、障がいの知識など、必要になる場面ではスキルが追いつかず悩む職員もいます。定期的に研修会、または職員同士でコミュニケーションをとりつつ知識を（技術も）習得する必要があります。（後略）」
- ・「多様性のある教育やさまざまな違いや課題をもっている子をうけいれるにあたり、保育者や教員などのフォロー体制が整ってないと、負担が大きくなる。」
- ・「園の環境が誰でもわかりやすく取り組める様な表示になっているが、（中略）担任ひとりでそれぞれ違う対応をすることは難しいのでそこが大変だと考える。」
- ・「一緒に働く先生方全員と『インクルーシブ』教育への同じ共通理解をし、実践して行くには研修を重ねたり、ミーティングをしたり、保育以外の話をする機会を設けていくことが必要になってくるので少し大変だと思った。」
- ・「遊びのイラストや文字での提示、1日の流れや時計の表示など、園全体でどの学年も同じ共通認識をもって設定している。しかし、毎年変わる職員（新採など）に対しその大切さを伝えるなど、実感してもらう難しさを感じる。」

記述内容の例にあるよう、体制に関して記述した保育者は、保育施設全体の関わりでインクルーシブ保育・教育は効果を発揮するものであることを認識している。しかし、園全体の共通認識として保育者全体が目的や方法について理解して取り組むためには、強い組織としての主体性が必要である。また、バックアップ体制も必要である。記述内容は、インクルーシブ保育・教育に対する保育者の組織の在り方への期待を

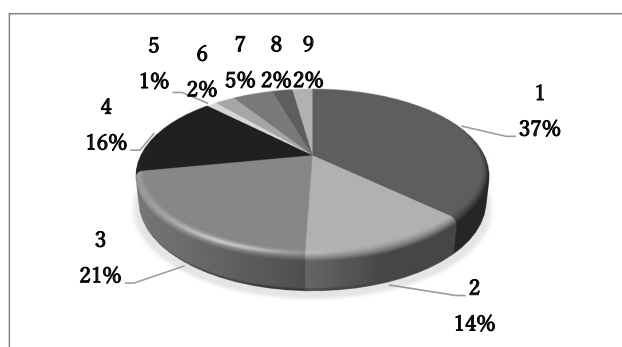


図4 保育者が必要と感じる支援（割合）

表わしている。したがって、次の質問では、保育者にとっての支援について特化して考えていく。

4. 保育者が必要と感じる支援について

（アンケートⅠ設問Q5・アンケートⅡ設問Q6）

アンケートⅠの設問Q5とアンケートⅡの設問Q6の回答数を、表11と図4に示す（アンケートⅠの設問Q5とアンケートⅡの設問Q6の質問内容は同じである。アンケートⅡでは、設問Q5として別の質問を挿入したので、番号が異なった。また、図4の1～9の数字は表11の記述内容の数字に対応している。）。回答数は、回答した保育者が複数の内容を記入したものを全て載せてある。したがって、合計数が実際の全回答保育者数の合計である54を大きく越えている。また、今までの回答数の中で一番回答件数が多い設問となった。

図4からも分かる様に、保育者の回答で多いのが、記述内容1の複数保育者の支援・配置を願う回答に類するものである。この回答結果は、設問Q3の支援を要する子どもたちの関わりについての回答内容と合致している。回答した保育者は、個と集団の並行保育・

教育を成立させるため、即時的対応法として選択している。したがって、調査に協力した保育施設では、普段の保育状況から、保育者が何らかの手立ての必要性を感じながら、保育にあたっていることが読み取れる。一例として保育者の記述を紹介する。

- ・「年長だったこともあり（加配者なし）、どうしても支援の子がやりたいことがある時に、副担の先生とその場を離れて過ごしてくれたのが、正直助かった（現実的に進めていきたい活動があるため…）。
- ・「手厚い保育士の数があると嬉しい。」
- ・「支援を要する子にしっかり対応できるように保育士を確保できれば良いと思います。担任だけでなく園全体で子どもたちをみているので、お互いに声をかけ合い、手助けができるような雰囲気作りが大切だと思います。」
- ・「幼稚園ということもあり、年中からはクラス担任が1人でクラス全体を見ている。支援を要する子が診断されていない場合はクラス全体を見ながら支援しなければならない。どの学年にもフリーの先生がいて、何かあったときに全体を進めたり支援を要する子にかかわったりすることができたらと思う。」

次に、記述内容で多かったのが、記述内容3に表わされる園舎・保育室等の物理的環境であった。インクルーシブ保育・教育を行う際に配慮されるのは、必要以上の刺激となる情報の抑制および、視覚的情報による伝達である。さらに、支援を要する子どもの指導には、心を落ち着かせたり、こども同士が話し合ったりする場の確保も求められる。物質的な環境への配慮が重要な要素になっている。

3番目に多かったのが記述内容4にあたる、職員全体との情報交流・共有の会や専門的な知識や技術にふれる研修会等の設定であった。

- ・「園に支援を要する子どもに対する対応に詳しい先

表11 保育者が必要と感じる支援

記述内容	施設A	施設B	施設C	合計
1. 支援児を共にみてる保育者の園としての人的支援	8	15	10	33
2. 専門家のアドバイスを中心にした人的支援	8	2	2	12
3. 園舎・保育室で落ち着ける、行動がみえる安心・安全な環境	6	8	5	19
4. 個別の支援計画・指導内容や方法の相談検討・制度・勉強会・情報交流	5	9	0	14
5. 定員の軽減等、運用や制度	1	0	0	1
6. 保護者との連携	1	1	0	2
7. 他の施設との連携	0	4	0	4
8. 掲示等の環境整備担当の支援助手	0	0	2	2
9. その他	1	0	1	2
合 計	30	39	20	89

生がいて、相談に乗ってもらったり、アドバイスをもらったり、各クラスを回りながら、その子の様子や成長と一緒にみてもらえると嬉しく心強いと思います。身体的に大きな障害をかかえている子に対しては、特にやってはいけないこと、した方がよいことなど専門的な助言などをしてもらえると安心ですし、保育士の知識も増えていくと思います。」

この回答は、即時に保育者が支援してもらえる環境であることに、安心感を表わしている。保育者は、試行錯誤しながら自分の経験値を基に子どもの保育を続けている。子どもへの対応が上手くいっている場合はよいが、そうでない場合は不安となる。したがって、支援の体制が整っていることは、保育者の大きな支えとなる。若干件数は少ないが、記述内容2の外部専門家からのアドバイスも同様な意味を含んでいる。また、保育活動の方針も含め、保育施設の経営方針を策定する際の資料のひとつとなる。

5. 保育施設の共通理解と実践（アンケートⅡ設問Q5）

アンケートⅡの設問Q5は、アンケートⅠには行われていない。なぜならアンケートⅡは、インクルーシブ保育・教育について研究を開始した保育施設の保育者に対して行われたものだからである。この設問は、特に本保育施設の課題を掘り起こすために行ったものである。質問は、「様子が気になる子や特別に支援を要する子どもの存在を確認するところから始めている。本保育施設からアンケートの提出に同意したのは、13名である。アンケートでは13名中12名までが該当する子どもが、担当クラスの中にいると答えている。この回答だけをみても、インクルーシブ保育に対する意識や関心は高いと考える。

本設問では、その意識や関心をアンケートⅠの設問Q4で保育者が記入した問題から導いた、3つの「配慮・取組」について質問している。その内容は、

- ①保育施設・環境面（保育室・園舎等）での工夫や配慮・取組（記述内容6）
 - ②保育者の対応・関わり方の工夫や配慮・取組（記述内容1・2）
 - ③保育計画（年間・期・月等）や活動の工夫や配慮・取組（記述内容1・6）

である。また、この3つの「配慮・取組」は、保育施設の回答内容から取り上げている。

最初に13名の保育者が、記入した個数を報告する（表12・図5）。

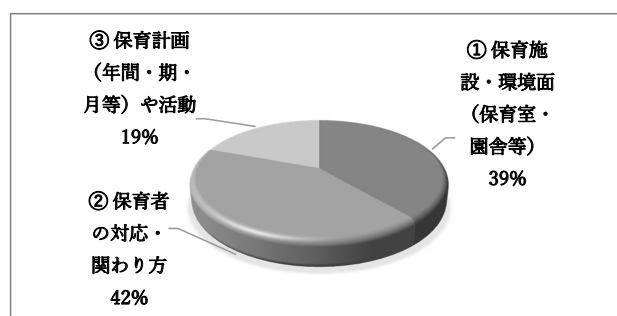


図5 保育者が必要と感じる支援（割合）

上記の結果から、本保育施設では、施設環境と保育者の対応や関わりについて、取組が浸透し始めている。具体的な内容を以下に探る。

①保育施設・環境面（保育室・園舎等）について

a) 視覚的表示の工夫

- ・自分の物・自分の場所が分かる工夫：顔表示の印
- ・玩具等片付け場所
- ・保育室の空間設定：認識形成のための線での区切り
- ・時計表示の工夫：見通しづくりで主体性をもたせる（終了・次の活動の開始：音効果で見通しをもつ）

②保育者の対応・関わり方について

a) 子どもに関する情報を教職員間で共有

（子どもの情報・保護者の反応・外部機関情報等）

b) 重点的な関わり：

目を離さない・事前の声かけと代償行動の提案
保護者との連携

c) 障害状況に合致した対応：

言語・発話への対応としてスピード、視線共有、
発問の工夫（返事内容が深まる工夫）
端的で短い伝達内容の工夫
繰り返しの丁寧さ

d) 指示方法の工夫：

持ち物、準備物の指示、言葉と視覚情報の併用
端的で短い文言による理解促進

e) 子どもに関わる際の工夫：

学年単位で活動を行い、個への対応機会の設定
落ち着ける余裕（クールダウン）を与える関わり

表12 保育者が必要と感じる支援領域

記述内容	合計（件）
①保育施設・環境面（保育室・園舎等）	12
②保育者の対応・関わり方	13
③保育計画（年間・期・月等）や活動	6
合 計	31

賞賛行為（約束遵守・課題解決）：言葉と賞賛行動ルーティンを決めて遂行

園全体の統一した関わり方マニュアル：言葉のかけ方・着替えの順番・見守るスタンス

③保育計画（年間・期・月等）や園活動について

- a) 確認を細かくおこなう
- b) 活動設定は、子どもの実態に合わせた内容
- c) 保育計画の柔軟な運用・実行（拘らない体制）
- d) 視覚的配慮を前面に考えた、活動づくり
- e) 預かり保育：異年齢の関わりを重点化（関わる工夫）
- f) 外部機関への相談対象児：個別の対応計画を作成・保護者とのコンセンサスを得る

保育者からの回答は多岐にわたる。保育者は、試行錯誤しながら様々な工夫をし、個の特性に応じた保育に当たっていることが分かる。問題点は複雑である。インクルーシブ保育で悩んだときは、基本に立ち返るということも大切である。酒井と中野（2023）は、悩んだ際には、「障害の有無に関わらず『一人ひとりの育ちを支援すること』や『子ども同士が育ち合う保育の実践』」を忘れないことが肝要であることを述べている⁷⁾。保育環境として考えられる視点は、「保育者や子どもなどの人的環境（ヒト）」「施設や遊具・教材などの物的環境（モノ）」「自然や社会の事象（コト）」である。酒井らはその中で、「人的環境（ヒト）」が、インクルーシブ保育・教育には重要であることを述べている。本アンケート・設問Q5の記述内容で、それにあたるのが②の部分である。しかし、アンケートの記述内容には、子ども同士が関わり合うことを促進させる記述をはっきりと読み取ることはできなかった。したがって、今後の課題として、②の視点の子ども同士の関わりや他を認め合う、様々な保育環境を整えることが必要になると考える。この取組を今後の課題としていきたい。

IV. まとめと課題

本研究は、インクルーシブ保育に関する取組で、環境改善の視点を明確化するために実施された。そして、協力を得た三つの保育施設のインクルーシブ保育の実態を把握し、改善の方向性を探るため、アンケートを実施した。アンケートの回答および提出に同意した保育者は、総計54名であった。

アンケートの回答は、設定された質問に対して主に自由記述を中心にした。回答を記述内容に沿って分類し、回答者の思いを分析していった。保育形態（同年

齢編成保育・異年齢編成保育）に関しては、施設Aと施設Cが、幼稚園（認定こども園）であり同年齢編成の保育形態であり、施設Bが、保育園（認定こども園）の異年齢編成の活動を積極的に取り入れていた。

しかし、支援を要する子どもへの効果的な対応をみると、保育形態における差異がないものとそうでないものがあつた。

対応に差異がないものとして、「好きな活動に十分ひたらせ、次の活動の意識づけをすること」、「加配支援者の個別対応」がある。特に加配の問題は、保育者が必要と感じる人的支援として、どの施設においても記入内容が複数あつた。特徴として、三つの保育施設に共通している記述は、加配の保育者の存在であつた。しかし、支援を要する子どもを加配の保育者に任せ、個の活動で終結させるのではなく、全体の活動を意識した保育活動にしていくことが大切になる。多くはないが、個の活動から集団での活動へ誘う内容の回答がみられた。保育者の言葉かけによって、子どもが個の活動から集団への活動に動機づけられる。子どもが自由で主体的な活動選択ができる保育環境を設定する。それにより、集団活動への意識づけを期待した記述もみられた。

保育形態に差異があるものとしては、子どもへの「事前の活動予告（情報提供）」があつた。サンプル数が少ないのでこの理由について考察するためには、更に様々な保育施設への関わりが必要である。

また、施設Aと施設Cでは、「視覚情報と言語情報」の活用が挙げられている。この結果は、予想できるものである。視覚情報について藤野（2023）は、多様なニーズのある児童生徒に求められる対応の中で、「音声言語以外のコミュニケーション手段として絵や写真などがよく使われている。しかし、それらは、自発的な意思伝達の手段として十分活用されているかどうかは検証が必要だろう。」と述べている⁸⁾。保育者は、子どもへの情報内容の伝達や指示内容の理解のために、視覚情報を活用する。しかし、回答には、主体性と協同性を身に付けるために、視覚情報を活用している内容は見当たらなかった。この点については、今後検討に値するものとしていきたい。

インクルーシブ保育実施の課題や問題点については、①個と集団の関係②保育者間の人的環境③保育施設の体制について記述がみられた。①に関しては、集団に取り組みせたい活動と個が欲する活動の整合性がとれない場合の困難さである。保育者と支援を要する子どもとの対応関係だけでは、問題解決に至らないことが多い。子どもたちが自主的に問題解決できる環境を整えることも肝要である。②に関しては、保育者の数的

ゆとり、子どもの状況と保育方針の共通認識、および、関わりや連携が鍵になる。③に関しては、保育方針・計画も含めた、保育施設や外部の保育機関全体のバックアップ体制である。多様な個性や特質をもつ子どもたちを、その差異を受け入れ、生かしていくインクルーシブ保育には、これらの視点が肝要であることが浮き彫りになった。

また、アンケートⅡの設問Q5は、インクルーシブ保育の研究を開始した施設のみに実施した。保育者は特に保育施設面と保育者の対応や関わり方について合わせて25件の回答があり、二つの設問は、ほぼ同等数の回答となった。インクルーシブ保育を考える場合、人的環境を充実させる必要がある。保育者の回答には、対象となる子どもへの関わり方に関する記述は多い。しかし、子ども同士の関わりを促進させる記述内容は見当たらなかった。この点がアンケートから明らかになり、今後の研究につなげていく資料となった。

謝 辞

本研究を実施するに当たり、札幌および山形の認定こども園園長および保育者の皆さんに、ご協力いただきました。園長先生及び担当窓口の先生には、アンケートの実施、およびその取りまとめをしていただきました。ここに改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

- 1) 文部科学省：「幼稚園教育要領」〈平成29年告示〉、フレーベル館、2017
- 2) 子ども家庭庁：「保育所保育指針」〈平成29年度告示・厚生労働省〉フレーベル館、2017
- 3) 子ども家庭庁：「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」〈平成29年告示・内閣府、文部科学省、厚生労働省〉フレーベル館、2017
- 4) 芹澤清音：「インクルーシブ保育を実現する保育形態についての一考察」、帝京大学教育学部紀要 10, 2022, pp.85-97
- 5) 小方信二：「異年齢の関わりを促す園環境の構成」、日本生活体験学習会誌、第12号、2012, pp.11-23
- 6) 鬼頭弥生：「インクルーシブ保育実践におけるクラス集団づくり」－集団像に着目して－、東海学院大学研究年報 7, 2022, pp.57-70
- 7) 酒井幸子・中野圭子：『みんなにやさしいインクルーシブ保育 基本と実践を18の事例から考える』、ナツメ社、2023, pp.56-57
- 8) 藤野博：「多様なニーズのある児童生徒に求められる対応②～コミュニケーションと社会性の支援～」『これからの特別支援教育はどうあるべきか』、全日本特別支援教育研究連盟編、東洋館出版社、2023, pp.116-121

